

# 第1章 学級経営よもやま話

## 第4節 学級通信

学級通信には、保護者への連絡・通知が中心の「おたより」的なものと、子どもの作品や子どもへのメッセージが中心の「一枚文集」的なものがあります。ここで取り上げようとしているのは、後者の通信です。

この節は、

■学級通信は子どもをつなぐ「ボンド」■

■学級通信、このよきもの■

の2つの項から成っています。

### ■学級通信は子どもをつなぐ「ボンド」■

私にとっての学級通信は、学級経営の必須アイテムです。学級通信なくして、私の集団づくりを語ることはできません。

子どもたちを繋ぐ“仕掛け”を総称して、私はそれを「ボンド」と呼んでいます。「ボンド」は行事のこともあるし、総合の取り組みのこともあるし、授業のこともあります。そうした「ボンド」の大事な1つに、学級通信があります。

### ■魔法のボンド(「きらきら MORE」No.167 2006.3.14)

卒業記念に、おもしろい話を教えてやるよ。ぼくのポケットに「魔法のボンド」というのが入っている。とにかくよくくっつく。ところでこのボンド、なぜ「魔法の」となっているかということ、使い方に秘密がある。普通のボンドは、モノとモノに塗ってくっつけるけど、このボンドは変わっている。

こんなことがあった。どうにもみんなで力を合わせることの苦手なクラスがあつてね。「しばてん」に密かに魔法のボンドをすり込んでおいたのさ。すると、大したモンだねえ、じわっと効いてきたねえ。その後、「連凧」や「壁画」にいっぱい

魔法のボンドを仕込んでおいたモンだ。じわっと効いて、一度くっつけば効き目長持ちするのが特長だ。だが、ちょっと困ったことになってしまっただけ。もう卒業だということに、ボンドをはがす魔法を忘れてしまっただけ、……。

## ■「きらきらの子ら」へ(「きらきら MORE」No.173 2006.3.20)

学年つうしん『きらきらMORE』は、なかまをつなぐ「ボンド」でありたいと願いつつ号を重ね、今最終号を書いています。「魔法のボンド」ほど効き目はなくても、『きらきら』を配った時に一瞬静かになる空気がぼくは大好きでした。今後、『きらきら』というタイトルの通信は二度と発行しません。そして、きみたちのこの1年間の歩みを心に刻んで、「きらきらの子ら」と呼びたいと思います。

「ボンド」の意味するところは、「教育の森」全体の中で感じ取っていただくしかありません。コトバで説明して伝わるものではないからです。ここでは、理念として、心に留め置きいただきたいと思います。

## ■学級通信、このよきもの■

教師9年目の1986年、初めて障害児学級担任になりました。この年チームを組んだ3年生教師集団は、私よりも3から7才若い女性3人でした。この若い仲間たちの手助けにと発行したのが、「教育雑記帳」です。その中から、学級通信関係のシリーズを紹介します。

### 学級通信、このよきもの(その1) 学級通信、このよきもの

「教育雑記帳」No.43 1986.10.20発行

ぼくは教師になって9年目です。最初の年は、一人の学級担任が持ち回りで編集する学年通信を発行していました。これはあまりにも無味乾燥なもので、2年目には、この年はぼくみたいに若い教師の声も聞き入れてくれる学年集団だったこともあって、月2回を原則とする学級通信を発行しました。この時には、子ども向けの「花咲き山」と保護者向けの「やまんば」の2本立てでした。

本格的に学級通信や一枚文集に取り組みかけたのは3年目からということになります。3年目、4年目(5年生、6年生)には「ふるがわ」(89号356枚)を出しました。6年目(6年生)は「のびる」(99号237枚)を発行し

ました。8年目(6年生)は「れんだこ」を発行したものの、事情があつて6月中旬で挫折。卒業前の10日間、「日刊6の1」(12号30枚)を出しました。そして、これらの卒業生を「ふるがわの子」、「のびるの子」、「れんだこの子」と呼んでいます。

結構横着者のぼくが、もう止めにしようかなと何度も思いながら、それでも続けてきたのは、確実に子どもが変わっていく姿に出会えたからでした。「ふるがわ」以降の通信は、完全に子ども向けに書いています。子どもに向かつてぼくの思いを投げかける、子どもが変わっていく、その両者の営みを親が見守っているのです。ぼくにとって学級通信は学級経営の生命線でした。そして、実はぼく自身が子どもの変わり目に出会うことによつて多くのことを学んできたのでした。まさに、学級通信、このよきものであるわけです。

ぼくにとっては「ふるがわ」の子らとの歩みが、その後を方向づけていているのですが、その子らの書き残したもののいくつかを紹介します。

■ 5の2になると“ふるがわ”という学級通信があり、私はそれをきっかけに仲間のことをよく考えるようになった。私は“ふるがわ”をくばってもらうのがすごくたのしみだった。(Kりえ)

■ 私はこの学級でいろんなことを学んだ。いちばん大きく心に残っているところは、やはり仲間のこと。私が学んだことは、たいてい先生が出したふるがわから。ふるがわって、とても重要な役割を果たしてたから、わかるのはつらい。(Fりえ)

■ 草尾先生にはいろいろなことをおそわりました。その中でも、一番心に残っているのは差別のことと戦争のことです。先生は、すごく差別や戦争のことについては熱心でした。わたしは戦争のことについて先生に話をきくのが大好きでした。「ふるがわ」を先生がくばるのがまちどおしくて、すごく読むのが好きでした。わたしが結婚するとき、「ふるがわ」をもっておよめにいきたいです。(Mくにこ)

「のびる」のクラスに姉がいて、「れんだこ」のクラスに妹がいたHさんは、妹が中学校に入学して半月ほど経ったころ、次の様な手紙を下さいました。

■ ……のびるのクラス、れんだこのクラス、4年間続けて本当にお世話になりました。……卒業前の10日間のプリントの1枚目を見たとき、何かホッとしたような、やっぱり草尾先生だと安心致しました。実は妹は日記も書かなかつたし、「れんだこ」も途中で切れたし、事情を知るまでの数か月間は、今度のクラスは先生も力が入らないのかなと思ったりして、物足りなさを感じていました。……そして、最後の

10日間のプリント、卒業に関する文集、先生の残された文章1枚1枚に胸を打つものがあり、彼女たちの大事な思い出と、人間としての指針、先生の思いが本当に理解できるのは10数年先、自分も親となり、子どもも同じような年頃になってからかも知れません。今は一度読んで読み返すこともなく本箱に置かれているだけですが、火事などの時には一番に持ち出してやりたい大事なものです。

## 学級通信、このよきもの(その2)

「教育雑記帳」No.44 1986.10.21発行

なぜ学級通信を書くのでしょうか。行事予定を知らせたり、学習の予定を知らせたり、あるいはまた生徒指導の道具にされているような通信は問題外です。ぼくにとっては学級経営の中心であったと思います。そうである前提として、子どもに生活を綴らせる営みがありました。今回はこの問題に触れたいと思います。

### 生活を綴る

「何でも言える学級」などというスローガンを教室の前に掲げたりします。しかし、現実にはなかなかそうはならないものです。なぜでしょうか。いろいろな原因があるでしょうが、ぼくは教師が子どもに生活をきちんと見させる努力をしていないことが、一番の原因になっていると思っています。

10月7日(火)

「ああ、つかれた。」という声が出た。お母さんはようじで、家にはお父さんしかいなかった。お父さんは、毎日休みなく働いている、と思うと、しんどくないのかなあと思う。すぐ、お父さんはねころんだ。「うーん。」と手足をのばした。「よっぽどつかれているんだなあ。」と、わたしは思った。また、あすも行く。朝も早く行く。ねむくないのだろうか。

10月8日(水)

お父さんが帰ってくるのがおそかった。帰ってきた。服をぬいだすぐ、またきのうのようにねころんで、「うーん。」と手足をのばした。「ポッ、ポッ」というかんじの音が出た。それは、手、足からきこえてきた。たぶん、のばしたらなるんだらうと思った。(N)

もう、随分古い日記です。決して素晴らしい文章ではありません。しかし、これはNさんが父親について初めて書いた日記なのです。それまでは、「やさしい」ということ以外は書かない子でした。彼女のお父さんは、ごみ収集車に乗っている現業公務員でした。この職業に対する社会の偏見がある中で、

彼女は口を閉じてきたのでした。しかし、彼女の生活は間違いなくこの父親の収入によって支えられていたのです。現実を正面から見つめさせたいと思いました。そこで、仕事から帰ってきた直後の5分間の父親を綴らせる取り組みをしました。何度かの赤ペンと、仲間の日記に励まされて綴ったのが、先の日記なのです。これをきっかけに彼女は父親の疲れの原因に迫っていくこととなります。

朝6時30分に家を出て、大阪の職場に着くのが8時前。それからトラックに乗ってごみを集め、3、4回往復すると3時ごろになる。それから風呂に入り、4時に職場を出る。夏の暑さや、冬の寒さは格別にこたえるらしい。その1日の労働の結果が、あの日記の姿となって表れていることを彼女は確かめていきました。さらに、大阪で働く前は、電気屋で働いていたことを聞き取ってきました。そして、「大坂で働くのは、電気屋で働くよりずっと『ふうっ』というぐらいつかれる仕事」であることを知るのでした。彼女は、そのことから生活の重みや部落差別を知っていったように思います。

ぼくは、日常的に生活を綴らせるという営みを欠いた学級経営などないと思っています。日記であれ、グループ日記であれ、作文の授業であれ、綴ることを通して確かなものを見る目を育てていくことです。父母の労働や仲間のこと、そしてそれに関わる自分自身の生活を大事に書かせたいですね。具体的な場面で生活を切り取らせるということをしなくてはならないと思います。何が大事なのかということ自分の頭で考えて選ぶことのできる力をつけてやらなくてはなりません。その上で、しっかりと思い出して綴れる力をつけてやることです。

「何でも言える学級」なんてまやかしに過ぎないと思っています。「何でも言える学級」の前提には、「何でも書ける学級」というのがなくてはならないだろうと思います。しかもそれは、「せんせい、あのね」という言葉に代表されるように、その子と教師との関係において書かれていくのだと思います。実は、そこまでいくのが大変なことで、子どもは本当に大事なことというのはなかなか語らないものです。教師がどれほど自らを語ってきたかというのが重要なポイントのような気がしますね。奈良の中山さんは、5行には5行の、2ページには2ページの返事を書いたと著書の中で述べられています。子どもが心をひらこうとするときに、それに向き合う教師の有り様が問われる気がします。

「せんせい、あのね」から始まったものを、「あのなあ、みんな」に高めていくのが次の段階としてあるわけです。これは次号で触れます。

## 学級通信、このよきもの(その3)

「教育雑記帳」No.45 1986.10.22発行

学級通信が学級経営の生命線であるというのはどういうことかという問題について考えてみたいと思います。

「せんせい、あのね」から「あのなあ、みんな」へ

### ①広める

学級通信が果たす役割の1つに、子どもたちの中に価値を広めるということがあると思います。

下に紹介したのは、5月31日という学級集団が出発して間もないころの日記です。具体的な場面が綴られていないために様子をつかみきれないのですが、仲間を向けて生きている姿は読み取ることができます。この時期の日記というのは、家へ帰ってから遊んだことや、習い事に行ったことを書いているのが多いものです。そんな子どもたちに、仲間のこと、それも内面に関わって物を見つめさせたいと思うのです。Naさんの日記は、不十分ではあるけれども、子どもたちに仲間と向き合って生きることを教え、励ましていくきっかけになるだろうと思いました。そうしてできたのが、「のびる」No.25なのです。

1982.6.4(2) No.25  
**のびる**  
学級通信 25号  
発行人 Naさん

五月三十一日

なかまの中に 他人が気付  
いていないよさを 見つけよう

今日の一日は、福井さんにとりついたら良かった。ようちやんはとて  
も心やさしいんだなあと思った。井上のさっちゃんが一人である時も福井さん  
とんでいてあげたり、弱いのくやしさは本気でなめてきてくれる。自分がい  
っしにやるのではなく、考えをさっちゃんに持たせて相手の方へ向かってくれ  
る。相手が自分の悪さに気付けば、自分が悪かったと反省してはいる。ようちや  
んはとて優しい友だちです。この善悪をみんなが知りあえる仲間になればいい  
い。

福井さんが具体的にどう行動したかは先生にはわからない。しかし、この文章か  
らおぼろげにわかる。意味だと思つ。

先生には福井さんの行動と同じくらい意味がある。それは、おぼろげにわ  
かる。とりつかれたみたいだと言っている。友だちの立場が行動を見て意味だ  
と思つた。おぼろげに意味だ。そして、そのことを一日中もちつて、一日の  
終わりの日記に書くとめたことだ。意味だ。なかまを見つめ、なかまをわか  
てまわすことだ。

あるグループの日記の中で、論争が起きている。結構なことだが、最近行  
きかたがわからない。相手を非難しはじめたのである。残念ながら非難のしめは何か  
残るものはない。真実をいいたいものだ。なかまの悪口を言ったり、非難を  
する。これはやすらう。だが、本音になかまのことを思ふのなら、非難する前  
に相手の側から考え直してやろう。見えやがらみでくるはずだ。それとともに、  
なかまの中に他人が気付いていないよさを 見つけよう。

なかまのよさが見えるのは、自分の中にも同じよさがある  
からだ。同じよさを求める心があるからだ。たかさんの  
よさが目に見える人は、たかさんのよさを 見つけた人だ。

### ②投げかける

# のびる

小学館 1433編  
発行人

## 「バンドエイド」のつながり

を。考えよう！

「なによし」から「なまま」「なまま集団」へ

「なまま集団」は、むかしからいうふうであった。たとえば、同じ色、同じも

「なまま集団」は、むかしからいうふうであった。たとえば、同じ色、同じも

「なまま集団」は、むかしからいうふうであった。たとえば、同じ色、同じも

「なまま集団」は、むかしからいうふうであった。たとえば、同じ色、同じも

「なまま集団」は、むかしからいうふうであった。たとえば、同じ色、同じも

「なまま集団」は、むかしからいうふうであった。たとえば、同じ色、同じも

「のびる」No. 35 は、学級の中にある何人かのグループがバンドエイドを手首につけることによって仲間の“しるし”にするというできごとを通して、仲間とは何かということを深く考えさせることをねらって、子どもたちに投げかけたものです。

子どもたちに価値を広めること、更に価値あるものに向けて投げかけること、それが、「せんせい、あのね」から「あのなあ、みんな」に高めていく筋道になるのだと思います。

こんなことなら口で言うだけでもいいのではと思われるかも知れませんね。一度でも学級通信を出したことがある人なら、これに答えるのは簡単だと思います。子どもの食いつきようが違うのです。通信を配った時の静寂。食い入るように見つめる目。これがたまらなく好きで、ぼくはやめられないんじゃないのかなと思ったりします。

### ③考え合う

考え合うことを通して集団が高められていきます。「あのなあ、みんな」の関係は、こうした積み重ねの上に成り立つのだと思います。(この項は「その4」で具体例を示して記述していますが、本稿では省略します。)

## 学級通信、このよきもの(その5)

「教育雑記帳」No.47 1986.10.24発行

今回は、しんどいこと、重たいことをなぜわざわざみんなの中に出していくのかということについて触れたいと思います。

明るい所からは明るいものしか見えないけれども、  
暗い所からは何でもよく見えているのだ。

上の言葉は、去年の奈同教研究大会での蔵本穂積さんの記念講演の結びの一節です。「のびる」の子どもたちとの一場面(注:1983年)を紹介します。  
わたしの「本当のこと」を聞いてほしい!  
あなたの「重いもの」を聞かせてほしい!  
そんななかまをふやしたい!!

10月29日(土)、こんなスローガンをかかげて23名(うち8名は部落の子)の子どもが「狭山」集団登校(注1)に参加した。

「中原(仮名)」をめぐる取り組みが始まってから教室の空気がかわってきている。そうした中で私は集中的にいくつかのなげかけを行った。つまり、1つは子どもの作文や授業参加、懇談を適して「障害」児の問題を、1つは「便所掃除」という詩を通して労働の問題を、1つは「ある手紙の問いかけ」というビデオを通して在日朝鮮人の問題をなげかけた。ついでながら告白すると、私は「便所掃除」という詩との出会いによって、糾弾会(注2)の後「私はこの子らの前で自分の生いたちと父親のことを語らねばならない。権力の末端にある自分が子どもの側に歩み寄れるとしたら、これはその入口のように思える」と書いた思いを、実に1年かかってやっと遂げたのだった。

さて、話は再び10月29日。狭山現地調査のビデオが終わった教室の中。木下(仮名)が立ち上がった。そして、静かに話し出した。

「僕のおとうさんは、土木の仕事をやっています。僕にとっては土木の仕事はいいと思います。でもこの仕事のことで差別もありました。でも僕はお父さんの仕事はいいと思う。みんなはこういう土木や建設の仕事は、よごれるからいやという。でも僕は、お父さんのあとをつごうと思う。」

張りつめていた空気が止まった。Tiは顔をふせてしまった。彼女は土木の仕事をする父のことを書いた原稿を用意していた。しかし読めなかった。彼女は授業後の感想にこう書いている。「木下君の話聞いてお父さんのことを読みたかったです。でも私が読んだら、つまってなにもいえなく



なり、なみだが出てきそうになる」から言えなかったと……。同じ土木業の父をもつT aも言えなかった。廃品回収の父をもつK iも語れなかった。

「国がちがうからといって差別をしないで」という原稿を準備したS uも語れなかった。K iは「みんなの前でいえなかった。そうとうゆうきがいることがわかった。ゆうきをだして、こんどのときにはいえるようにしようと思う」と感想の中に書いた。それでいい。今はそれでいい。自分の中にある一番重くてしんどい思いを言える自分になりたい、聞いてくれるなかまをつくりたいという自らの課題をもって集団登校に取り組んだことを今は評価してやりたい。

そのあと私は、修学旅行で亡き母への土産をまっ先に買ったIの話をした。「おっちゃん」と同居しながら「私はお父ちゃん似や」と五条にいる父に思いを寄せる南(仮名)、その彼女が夏休み前、お母ちゃんと「おっちゃん」においてけぼりにされたことを話した。亡父の姓「松山(仮名)」と母の姓「M o」と母の主人の姓「S a」の3つの姓の間で生きる松山のことを話した。幼い頃別れた父への思いを胸に生きるH aのことを話した。6月から3か月間父が行方不明だったS uのことを話した。

子どもたちの顔がゆがんだ。「わたし、びっくりした。ほんとにびっくりした。一人一人の家庭の中にこんなことがあるなんて考えもしなかった。みんな何くれぬ平気な顔でくるんだもの。きのうとかかわらぬ顔でくるんだもの。」とFは書いた。「先生の話聞きいていてなきたくなかった。いつもならちゃんときいていないのに。すごく、なんていったらいいかわからないぐらい、すごくかなしくなった。なきたくなかったけどなけなかった。すごくこの時間はよかった。」とMは書いた。「今、先生が話してくれたので私の心はすっきりしました。」南はそう書いた。松山は「ぼくはほっとしました。たぶんH aもほっとしたと思います。」と書いた。彼ら、彼女らは、自分の一番の“秘密”を内緒にしておきたいと思うのと同じくらいに、みんなに知ってほしいと思っているのだ。言えるだけの条件がそろいさえすれば……。

それだけではない。松山のことを「M o君」(この時の担任の名前)とからかって呼んで遊んでいたというのだ。父親が行方不明でしずんでいるS uに「ネグラ」という言葉をあびせていたというのだ。

子どもは想像以上に深いところで“しんどさ”を背負って生きている。まわりの子がその彼においうちのパンチをくらわせていることさえある。それは、「ひごろあそんだりしているぐらいでは、とてもわからぬ」(Oの作文)いことである。“なかま”とか“なかまづくり”という言葉は私たちが安易に使う。しかし、“なかま”とは何と語るに易しく育てるに難しい言葉であろうか。

今回は余録になってしまった。しかし、中原をとりまく40人の彼ら、彼女らの高まりこそ、中原をかえていくエネルギーである。中原のことを考えるようになってから、子どもらは確かに以前より一步深いところでつながろうとしている。“主人公”中原は、静かに耳を傾けていた。彼もまた高まろうとしている。一進一退をくり返しながら……。

(記録文「おーい、なかはら」より)

ぼくは、自分の過去の拙ない教育にしがみついて生きようとは思いません。しかし、教師としての経験が浅い時期であればあるほど、子どもに教えられたことも多く、初めての体験ゆえの感動も深かったわけです。そういう意味で、ぼくにとって忘れることのできないものです。

生活の重みをみんなの中に出した後で、「私の心はすっかりしました」「ぼくはほっとしました」と語る子どもの言葉は衝撃的でさえありました。だって、ぼくらは、そういうしんどいことには触れないでいることがその子のためだと信じていたのですものね。だけど、子どもたちは自分のしんどさをみんなに知ってほしいと思っていたのです。自分の一番秘密にしておきたい部分をさらけ出した上で、なかまとつながりたいと思っていたのです。しかし、そういうことは、「さあ、言え。」と言われて言えるものではありませんね。その子にとって、自分の思いを受け止めてくれると信じられる集団になっとなきゃ言えませんね。ぼくらがめざす集団というのは、まさにそういう質を持ったものでなくてはならないのです。しんどさを心の奥深くにしまい込ませておく集団しか作り得ていなかった、そして、そのことになんの痛みも感じずにいた、そんな自分が恥ずしかったですね。

明るい所からは明るいものしか見えないけれども、暗い所からは何でもよく見えているのだ。今なら、何となくこの言葉の意味がわかるような気がします。家庭生活のしんどさを知ったところで、一人の教師や学級の子どもたちに解決できることなんて何もないでしょう。しかし、その位置からものを見ることはできます。S u君のお父さんを捜し出すことはできないけれども、彼が沈み込んでいる思いに心を寄せることはできるわけです。彼の表情の奥にあるものが見えるわけです。そうしたら、間違っても、その彼に「ネグラ」という言葉を浴びせることはなかったでしょう。

クラスのバックボーンというのがありますね。クラスの思想性、集団の軸ということです。「のびる」のクラスで言うならば、「狭山」集団登校の時に掲げたスローガン、そしてその上に立った反差別の思想こそが、バックボーンであったと思います。

なぜ、わざわざしんどいことを言わせるのか。そう問われたら、そこからしか本当のものは見えないし、本当のものは始まらないからだと答えます。

そのために、子どもたちの間に価値を広め、問題を投げかけ、考えあわせることを通して、クラスのバックボーンを作っているのだと思います。学級通信は、そのために欠くことのできない手段であり中身なのだと思います。

一言付け加えておきますが、子どもの重みを教師がしゃべってしまっているのはあまりよくないなと思っています。実は、子どもにしゃべらせるところまでやりきれていなかったのです。ある意味では、暴挙であったかもしれません。ぼくの奥さんは、この秋、子どもたちの手でそれをやらせてしまいました。また、頭の上がないことが増えてしまったのであります。

なぜ学級通信を書くのか、何を書くのかということについては、ひとまず終わりたいと思います。次号からは、技術的なことも含めて書いていく予定です。

「狭山」集団登校(注1) … 1963年5月1日に埼玉県狭山市で発生した、高校1年生の少女を被害者とする強盗強姦殺人事件。1963年5月23日に被差別部落出身で元養豚場勤務の鳶職手伝い・石川一雄氏(当時24歳)が逮捕、起訴され、一審では全面的に罪を認めたが、一審の死刑判決後に一転して冤罪を主張。その後、無期懲役刑が確定し、1994年に仮釈放された。本事件については、捜査過程での問題点が提起されており、石川氏とその弁護団及び支援団体が、冤罪を主張して再審請求をしている。また、石川氏が被差別部落の出身であったことから、部落差別との関係を問われ、この事件に関する裁判は狭山差別裁判と呼ばれている。

石川氏はほとんど教育を受けておらず、逮捕時、警察・検察と弁護士の役割も理解していなかった。部落解放同盟は、そうした生いたちを部落の子どもたちの姿に重ね、学校教育の有り様を鋭く問うた。そうして裁判の節目に行われたのが「狭山集団登校」である。

糾弾会(注2) … 部落解放同盟が部落差別発言に対して行った糾弾集会。子どもによる差別発言の場合、子どもが直接責めを負うことはなかった。差別意識がある中で、それを払拭しきれなかった教育の在り方が問われた。

糾弾会を巡っては、社会党系教組と共産党系教組の激しい政治的対立もあった。それによって、学校現場が混乱したこともあった。私自身は3度、糾弾を受ける側に座った。しいどいことではあったが、指摘を受けて教えられることも多かった。

## 学級通信、このよきもの(その6)

「教育雑記帳」No.48 1986.10.28発行  
学級通信をなぜ書くのかということについてはひとまず終わり、技術的な

ことも含めた学級通信の心得なるものについて述べてみたいと思います。

## 労働者として

(前略)

教師は労働者です。ですから、“教育のため”、“子どものため”という美名のもとに、無制限に働くなど絶対に間違っています。家庭生活を著しく犠牲にし、命を切り売りすることの上に成り立っている教育は、その中身がどんなに素晴らしくても、間違っていると云わなければなりません。

ぼくらに与えられている時間は、等しく1日24時間です。あれも大事、これも大事と言っていけば、することなどいくらでもあります。1日が24時間ではとって足りないほどに仕事はあるわけです。そこで、仕事の取捨選択が必要になってくるのです。(後略)

## 学級通信、このよきもの(その7)

「教育雑記帳」No.49 1986.10.31発行

### 気まぐれ発行のすすめ

学級通信を1年間続けて出すというのは大変なことです。日刊でやる人もいますが、こういう人にはそれなりに敬意を表しますが、決してまねをしようとは思いません。

ぼくは、書きたいときに書く、その気にならないときには無理をしない、そういう気まぐれ発行を鉄則にしています。この気まぐれこそが、長続きの秘訣だと思っています。例えば、10日間に12号も発行している時があれば、およそ1か月間休刊が続くという時期もあります。

教育は熱だとぼくは思っています。技術が決して無意味だと言うのではありませんが、教育の多くは教師の熱によって伝わるものだと思います。だから、どうしても伝えたいことが多くあるときには、一生懸命に書きます。熱く燃える思いに包まれているときには、必至でそれを伝えようとします。卒業前10日間の記録「日刊6の1」などは、ただ子どもに寄せる熱だけで書き続けたものです。この時期の日刊の10号(25枚)(卒業後に2号5枚がある)というのは、正直言って大変でした。はじめにのところにこう書いています。(注:詳細は、「第1章 第8節 教育は熱伝導」で紹介します。)

「ふるがわ」にも、No.59からNo.71までが日刊で出ています。この時期というのは、子どもの日記を紹介しながらくらしやなかまに目を向けさせるということに集中的に取り組んだ時期です。やはり、子どもの日記の後に多くのメッセージを書いています。

繰り返し言いますが、教育は熱で伝えるものだと思います。教師の思いが

熱い時には、その思いを学級通信にぶつけばいいのです。しかし、お互い人間ですから体調のすぐれない時や、心配ごとや悩みごとのある時もありますよね。そういう時には、思いきって休みましょう。やすっぽい使命感で書いたところで、どうせろくな中身になっていないのですから。よって、気まぐれ発行なのであります。

## 学級通信、このよきもの(その8)

「教育雑記帳」No.50 1986.11.4発行

### レイアウト、カット、etc.

書きすぎないということが大事ですね。紙一面に文字を埋めると、読むのがしんどいのです。内容がすばらしかっても、読む気のおこらない通信では、意味がありません。余白を上手にいかすということを考えたいものです。余白が紙面を落ち着かせるのです。

文字の大きさもできるだけそろえた方が読みやすいと思います。達筆は紙面の落ち着きを失わせるような気がします。

書きすぎないということとある面では通じることですが、1つの号に書く中身は1つにしぼるということです。お知らせ程度のことを囲み記事などで書くのは別として、同じくらいの重みを持つ記事を書くのはどうかと思います。いろんなことを書くと、結局は何も伝わらないのです。(注:私の通信では、各号に内容を伝える見出しが付いています。)

~~カットなどにはこらない方がいいと思います。時間の無駄ですし、それがために発行が遅のくこと  
だっているからです。もともと絵の得意な人はその限りにあらずですが、ぼくなんかいつもカットな  
りです。~~ (この部分は削除します。手書きの時代は昔の話、今やパソコンで編集しますから、カッ  
トの苦労はコピーで解消です。)

子どもに配った学級通信は、必ず教師の声で読むようにしましょう。できれば、文章につながる話をしながら読む方がいいのですが、どんなに忙しいときでも、どんなことがあっても読んでほしいのです。教師の声とともに、それを書いた教師の思いが子どもに伝わっていくのです。

創刊号を出すときに、学年の終わり(あるいは学期の終わり)にとじるから大事に残しておくように予告しておきましょう。そして、実際に子どもの版面なんかを表紙に刷って、とじてあげましょう。単なる思い出のためではありません。自分たちが何を考え、どう生きてきたのかを残すためです。子どもは、1枚1枚増えていく通信を宝物のように残していくことでしょう。

学級通信には子ども集団を育て、学級を変えていく力があります。結果として、保護者をも変える力があります。少なくとも、私はそう信じて実践してきました。

## 補足として① 2013.3

私の学級通信の対象は、原則として子どもです。保護者も読まれることを想定はしていますが、完全に子ども向けに書いています。

実は対象が誰なのかというのは大事なことです。これが明確になっていない通信をしばしば見かけます。具体的に言うと、保護者に向けて報告する文章として書き出したのに、段落途中から子どもへの呼びかけに変わったりしています。せめて、段落内は統一すべきです。

私の場合、保護者に向けて書きたい時は、次の2つの方法をとっています。

### ① 子ども向け通信の中に保護者向けメッセージを入れる時

通信の中に「**おうちの方へ**」というコーナーを設けます。囲み記事にしてしまうこともあります。いずれにしても、一目で子ども向け部分と区別が付くようにしています。

「保護者」ではなく「おうちの方」という言葉を使っている理由に触れておきます。ある年に担任した家庭の場合、保護者は父親一人で、日常的子育てはおばあちゃんがされていました。そんな家庭に出会ってから、「おうちの方」という言葉を意識的に使うようになりました。

■小学校4年・学年つうしん  
**ほくと** 2012. 4. 6 (金) No. 1

**きらきらかがやいて生きよう!!**  
きょうから4年生。  
みなさんのなかまに入れてもらうことになりました草尾(くさお)と  
草尾です。言います。よろしくをお願いします。よろしく! 小学校生活後半のスタートです。たくさんのお楽しみが待ち受けています。同時に、上級生としての責任も待ち受けています。学校がみなさんにとって楽しいところになればいいなあと思います。勉強っておもしろいなって感じてもらうえたらいいなあと思います。そして、6人の一人ひとりのひとみが、きらきらとかがやいていればいいなあと思います。—そんなクラスをみんなの力でつくりますよ。

**おうちの方へ**  
このたび4年生の担任をさせていただくことになりました草尾。住務と申します。どうかよろしくお願いたします。  
■住所 奈良市都府山町 3889  
■電話 82-1120  
※学年つうしん「ほくと」は、基本的には子ども向けの通信として発行します。一緒に目を通していただければ幸いです。学年末には1冊にまとめたいと思います。  
なお、通信には日記等の作品を掲載させていただくことがありますが、不都合があればお申し出ください。

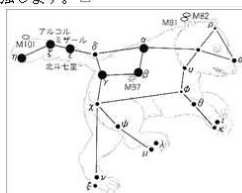
### ぼくらは今日から「ほくと」チームだ!

学年つうしん「ほくと」のことをお話しましょう。

「ほくと」を漢字で書くと「北斗」です。これだけではなんのことがわかりませんね。正しい名前は「**北斗七星**」といいます。

夜空を見上げるとたくさんの星があります。いっぱいあることを「星の数ほどある」と言うくらいですので、いくつあるのかわかりません。明るい星は見えますが、暗い星は望遠鏡でも見えません。星は明るい方から1等星、2等星、3等星…と言い、1等星は全部で21個、2等星は67個あります(季節や場所、時間によって見える数はちがってきます)。星のことは理科の時間に勉強します。

さて、いよいよ北斗七星の話です。北斗七星とは、「北の空に見える斗(ひしゃく)の形にならんだ七つの星」のことです。北斗七星はおおぐま座という星の集まり(星座)の一部で、7つのうち6つが2等星です。



6つの星+1つの星で星座を作っている北斗七星って、このクラスといっしょだと思いませんか?ぼくはね、みなさんに1番じゃなくていいからしっかりかがやく「星」になってほしいと思います。そして、6つの「星」が力を合わせて、ぼくもちょっと手助けをして、きれいな「星座」になったらすてきなと思います。そんなことを考えながら、学年つうしんに「ほくと」という名前をつけました。  
さあ、チーム「ほくと」、いざ出発!!



- 今日もらった新しい教科書に名前を書きましょう。ついでに自身ものぞいてみましょう。
- 月曜日(9日)、体位測定があります。体操服を用意してください。

※黄色に着色した部分が、「おうちの方へ」

## ② 保護者向け通信として発行する時

保護者向けに発行する時は、「**おうちの方へ特集号**」として出します。



**おうちの方へ特集号**  
**たかが鉛筆、されど鉛筆**  
 5月6日の朝日新聞に、鉛筆の持ち方を紹介する記事が載っていました。参考までに転載します。



今さら鉛筆の持ち方なんて…と思われるかも知れません。実際のところ、4年生の中には鉛筆を正しく持てる子は一人もいません。個性的と言えは聞こえがいいですが、明らかに許容の範囲を超えている子が何人もいます。その結果、漢字練習の手本をきちんとこなせなかったり、黒板を写すのにとても時間がかかったり、…。

この期に及んで「矯正」に乗り出したのは、書字速度を上げるためです。高学年になると、スピード感をもってノートをまとめたり、計算したりすることが求められます。しかも、文字が乱雑になってはだめなのです。—速く、きちんと書くには、鉛筆の持ち方を変えるしかありません。やり方はいろいろあっていいと思いますが、学校と家庭が同じ歩調で「クジャク法」に取り組んでみませんか。

### 手を放しても目を離さずに！

大型連休の前後2週間ずつ、生活リズムを作るための点検を行いました。この間、宿題忘れや持ち物忘れはかなり減ってきました。

点検カードや音読カードにサインしていただいている様子を見ながら、少し気になっていることがあります。子どもの育ちとともに、親は手を放していきます。その際、目も離れていってはいないでしょうか。

「叱りつけてばかりいると、子どもは(自分は悪い子なんだ)と思ってしまふ。励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる。誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ。認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる。見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる。守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ」これは、『子どもが育つ魔法の言葉』という本の一節です。(文庫本で売っています。是非、ご一読を。)目を離さないというのは、「あなたのことを見ているよ」というメッセージを、具体的な言葉で子どもに伝えることです。私は、「大丈夫？」という言葉がお気に入りです。「魔法の言葉」として使っています。まずは1日に1回、そんな言葉をかけてみてはいかがでしょうか。目が離れ、やがて、子どもの心が離れたなどということにならないように…。

「おうちの方へ特集号」は、子育てや教育の情報を提供したり、総合や運動会の取り組みで注目してほしいところを伝えたりするときに出します。子育てや教育の情報を提供するときは、説得力を持たせる意味でも新聞記事(前掲通信の青色部分)を使うこともあります。

繰り返しになりますが、学級通信は単なる「お知らせ」ではなりません。子どもを繋ぎ、子どもを変えていく、学級経営にとって欠くことのできないツールなのです。

## 補足として② 2013.3

これまで紹介した通信の中でもそうであったように、私の通信では子どもの綴ったものが大きな位置を占めます。その多くは日記ですが、日記には生活のかなり深い部分まで記述されています。子どもには、「通信には載せないで」といった断りが無い限り、原則として掲載される可能性があるかと伝えていましたので、重たい内容の通信もありました。子どもたちは、それを受け止めることで育ち合

っていったという側面もありました。

「個人情報保護」が学校の果たすべき大きな責任になった今日、「法」制定以前のような通信は考えられません。私の通信でも、子どもの綴ったものは学校内のことが多くなり、家庭生活の場合でも内容が「軽く」なりました。さらに加えて、地域社会の崩壊が進行していますから、保護者もプライバシーに関することを通信に書かれることを良しとしません。したがって、1990年代はじめごろまでの通信と、2002年以降の通信では明らかに趣が違っていています。どちらがいいということではなく、時代の要請だと受け止めています。

今、私は、かつて通信が担っていた「生活交流」の場面を「スピーチ活動」に求めています。スピーチであれば活字と違って後に残ることはありません。もっとも、通信を受け止められる子どもと同様に、友だちの生活を共感的に受け止め、言いふらしたりしない集団でなきゃなりません。

ここで「スピーチ活動」のノウハウを述べることはしませんが、通信と補完関係を持って捉えているということだけ紹介しておきます。